

研究報告書

## 医療系学部における教養教育のあり方を考える — 共同研究の中間まとめとブレインストーミングの試み —

中 島 英 司・田 辺 三千広  
森 川 孝 典・加 藤 順 一

### はじめに — 共同研究発足の経緯と小論の意図

#### 《共同研究発足の経緯》

1991年の「大学設置基準の大綱化」以後、ほとんどの大学で教養部が解体され、教養科目が削減されてきた。そして、今、「教養の衰退」とも評される状況のなかで、各種審議会で教養教育の再構築の必要性が強調されている。1998年の大学審議会答申<sup>(1)</sup>は、法曹や医療、教育、芸術など専門性の高い分野ですでに進行しているように、高度の専門教育は大学院で行い、「学部教育では教養教育と専門分野の基礎的能力を培うことが基本となる」と述べている。また、2002年の中教審答申<sup>(2)</sup>は「大学教育には教養教育の抜本的充実が不可避であり、質の高い教育を提供できない大学は将来的に淘汰されざるを得ない」と指摘している。

このような状況のなかで、私たちは、「医療系学部における教養教育のあり方」というテーマを掲げ、2006年度の学部研究費を申請して共同研究をスタートさせた。「リーダー的な医療人を養成する」という本学リハビリテーション学部の教育目標に照らして、現行の教養教育で十分なのか、教養教育を重視するという本学の教育理念にかなったものになっているのか、3年間の課程で修ることができる専門学校との差別化をどのように実現するのか等々、教養教育の意義や位置づけを明確にすることを意図した。

## 《2006年度の集団討議》

共同研究では、まず、他の医療系大学や学部（東京医科歯科大学、慶應大学医学部、名古屋大学教養教育院、鈴鹿医療科学大学）の教養教育の考え方やカリキュラムを収集し検討した。また、笠原正男前学部長（静岡赤十字病院病理部長）、市崎謙作元鈴鹿医療科学大学教授（教養担当）をお招きし、意見を聴取し教示を受けた。林学長や伊藤前学長にも数回勉強会に参加していただき、議論に加わっていただいた。さらに、本学リハビリテーション学部の教養教育改善の具体的方策についても議論を重ね、以下の諸点を確認した。

- 1) 1年生の必修科目である文化教養ゼミとその他の教養科目を有機的に結びつける
  - ・自らの学問のエッセンスや問題意識を文化教養ゼミの全体講義で示し教養科目への関心を高める
  - ・個別ゼミのなかで直近の教養科目の授業をどう受けとめたか議論する
  - ・文化教養ゼミで「生老病死」を取り上げ、同じテーマについて哲学や文化人類学などの授業でそれぞれの視点から展開して「知の統合」をはかる
- 2) 「教養は自分に無関係で不要である」と受けとめている学生がいるが、それぞれの科目の存在理由や講義内容の伝え方にさらに工夫を加える
- 3) 読書を大いに奨励し「教養」の種をまく
- 4) 他者の人生に寄り添うことのできる「豊かな人間性を涵養する」という観点から、文学作品や美術・音楽に触れる機会を増やす
- 5) 個別ゼミやアドバイザー制度などを活用して学生との人間的交流をいっそう深める
- 6) ここ数年実施している海外現地演習を学生の見聞を広める機会として重視する

今後、医療系や芸術系など専門性の高い学部における教養教育の実際をさらに研究すること、また、専門教育の先生方や教養科目を担当されている非常勤の先生方との意見交換を行うことを予定している。

## 《星城大学の「文化教養ゼミ」について》

さて、上述の具体的方策のなかで「文化教養ゼミ」という科目に触れた。また、次節以下の各執筆者の報告で「文化教養ゼミ」での実践がとりあげられている。ここで、その科目の教育目標と授業形態、運営の仕方についてあらかじめ説明しておこう。

本学では2002年の開学時から、リハビリテーション学部と経営学部の1年生全員を対象に、幅広い教養を培うことを目的として、週2コマの「文化教養ゼミ」が開講されてきた。この科目は本学教養教育の基幹科目と位置づけられ、1週1話の両学部共通の全体講義と、ゼミ担当教員による個別ゼミとで構成。それぞれの個別ゼミを担当するのは教養教員であるが、全体講義はゼミ担当教員だけでなく、リハビリテーション学部の専門教員や経営学部の教員、学外の研究者の協力も得てオムニバス形式で実施されている。

本学の「文化教養ゼミ」のユニークなところは、ゼミ担当教員が学生とともに全体講義を聴講し、個別ゼミではその全体講義をもとにして、それぞれの教員の持ち味を生かして内容を深め展開している点にある。互いに他の教員の全体講義を聴講し、その研究の一端に触れることにより教員同士の相互理解と信頼関係が醸成され、「学生により良い教育を」という気運が高まってきている。従来の大学教育には見られなかった、文字通りの「チーム・ティーチング」が芽生えているのである。また、すべてのゼミ担当教員が参加して毎週定期的に関われるゼミ運営委員会では、年間のプログラムや教育目標、授業改善についての検討をはじめ、全体講義での配布資料の準備や私語にたいする対応、個別ゼミでの展開のヒントや教材についての情報交換まで行われている。

2005年度には、当時の経営学部長からの提案を受けて、1年生の「文化教養ゼミ」に幅広い教養を培うとともに初年次教育的な性格をもたせ、専門に進むまでに大学生として身につけているべき基礎的な技能や力をつけることを教育目標として掲げた。具体的には、テキストを読む・問題や要点をつかむ・資

料を集め検討する・講義ノートのとり方を学ぶ・自分の考えを発表する・レポートや小論文の書き方を習得する、等々。形態にも工夫を加え、個別ゼミでの予習・復習と全体講義との計3コマを1ユニットとする7つのテーマと、単発の全体講義で構成することにした。講義に関心をもてない学生や、消化不良のままの学生を放置しないための措置であった。

しかしながら、二つの学部では初年次教育の内容や必要性に差があり、個別ゼミで予習と復習を行うことがリハビリテーション学部の学生たちには冗長な印象を与えているとの反省から、翌2006年度からはリハビリテーション学部では経営学部とは別のプログラムで進行することにした。全体講義と個別ゼミとの2コマを1ユニットとして、従来の1週1話のかたちで、多様な学問に触れて幅広い教養を培うという性格を強めている。

もとより、教育的な働きかけが学生にどのような変容をもたらしているのか、にわかに明らかになるものではない。ひたすら「学生に最良のものを」と手探りの努力を重ねているというのが現状である。

### 《小論の意図》

さて、このように精力的に議論を重ね、工夫をし、いくつかの具体的な改善策も打ち出してきたが、しかしながら、いまだ根本のところで見解の一致をみているわけではない。もとより「教養」という科目があるわけではない。教養科目群を担当するそれぞれの教員はそれぞれの専門分野をもち、学問の性格や方法も様々ではない。教養教育についての考えも微妙に異なっている。

したがって、これから議論を深めていくためには、まずは、教養教育かくあるべしというそれぞれの考えを披瀝し、互いに耳を傾けあうことが不可欠であろう。ここではその第一歩として、各人の教養教育の考え方や実践を出し合いたい。このような私たちのささやかな試みにたいする忌憚のないご批判やご助言をいただければ幸いである。

- (1) 大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」(平成10年10月26日)
- (2) 中教審答申「新しい時代における教養教育の在り方について」(平成14年2月21日)

## 1. 専門家の養成と教養教育 — 両者の関係をどうとらえるか

### 《東京医科歯科大学教養部の場合》

「はじめに」で述べたとおり、ほとんどの大学で、教養教育の責任担当部局が無くなり、その理念があいまいになり、専門教育への傾斜が強まっているなかで、東京医科歯科大学では教養部が残された。そこでは、医療に従事する専門家を養成する大学として、職業に直結する専門教育とともに、専門家として必要となる真の教養を身につけるための教養教育が重要であるとの認識のもとに、いわゆる一般教育とリベラル・アーツ教育を融合させた教育課程を編成し、さらにこれに加えて、医療人の育成という観点から、専門の基礎となる科目群という柱を立てている(東京医科歯科大教養部ホームページ <http://www.tmd.ac.jp/artsci/kyouyouHP/LiberalEducldea.htm>)。

### 《専門家養成と距離をおく教養教育の考え方》

医科大学のような単科の大学ならば専門家養成と関連づけて教養教育を考える条件や機会があるであろう。これにたいして、複数の学部をもつ大学で、学部をまたがって教養科目を担当する場合、教養担当教員は専門家養成とはひとまず切り離されたかたちで、人文・社会・自然の基礎的な科目の学問体系や自分が関心をもつ領域の問題を講じるのが普通であろう。バランスよく配置された教養科目群の修得を通じて自然や社会の全体像をつかみ人間にたいする理解を深めることは、学生たちがどのような進路をとるにしろ、世界観を確立し、自分の生き方を考える助けになるであろう — これが従来の教養教育の理念で

あり、教員の側の論理である。そして、このような論理からすると、「専門家として必要となる教養」というのは「教養」を狭く捉え、「教養」の概念を変質させるもののように受けとめられがちである。

### 《学生は教養科目をどう受けとめているか》

しかしながら、何より大きな問題は、教養教育の目標や理念が教養科目を受講する学生に十分に伝わっていないことである。「教養は自分に無関係のものであり、それなしでも生きていくのに何の不便もなく、医療者の活動には不要である」(06年前期授業評価アンケート)という学生の言葉はそれをよく物語っている。将来の目標が明確なりハビリテーション学部の学生の一部には、教養科目を疎んじる傾向がある。専門の勉強がしたい、医療系なのになぜ文系の科目をとらなければならないのか、これから自分が勉強しようとしていることとどう結びつくかわからない、・・・私たち教養教員はこのような学生の不満や疑問に講義内容を通じて正面から答える必要があるのではないか。教養科目群の修得を通じて期待される「知の統合」をおおまかにでも垣間見せるべきではないか。私は、従来の教養教育の目的や理念を保持しつつも、従来の延長線上ではない教養教育の展開が求められていると思う。

### 《専門家教育を中心にした教養教育 - 佐藤学の考え方》

佐藤学(2004)は「専門家教育」を「専門教育」や「職業教育」と区別したうえで、「一般的教養が専門家教育の基礎として必要である」と主張している。佐藤によれば、専門家とは「公共的な使命感」を強く意識して時代の要請に応える「反省の実践家」である。現場で課題を発見し自ら解決しようとする人間のことである。医療や教育・福祉などの分野では患者や子どもや社会が抱えている問題が複雑で、どんな小さな問題にとりくむ場合も、いくつもの問題の連鎖と向き合わねばならない。専門家として仕事を誠実に遂行しようとすれ

ば複雑で総合的な研究を開拓しなければならない。したがって、「反省的実践家」としての専門家教育が追求されるなら、幅広い教養教育と結びつかざるをえないのである。

言うまでもなく、医療者の場合、なによりも人間にたいする広くて深い理解が求められる。他の専門職との協働の能力も必要である。開業権が得られて独り立ちすれば経営の問題に直面する。卒業後数年経てば、臨床実習指導者として次世代を養成する課題を担うことになる<sup>(1)</sup>。医療の専門家の仕事は医療分野の知識や技術の行使だけにとどまらない。総合的な人間力や文字どおり「幅広い教養」が求められるのである。「教養は自分に無関係で不要である」と受けとめている学生にたいしてはこの点を噛み砕いて説き、講義内容を通じて理解をあらためてもらわなければならない。

### 《専門家教育と教養科目との接点》

私は、学生を中心にして教養教育のあり方を模索するという立場から、「専門家教育を中心にした教養教育」を試みるべきだと考えている。それでは、専門家教育と教養科目には接点はあるのか。「ある」と私は答える。たとえば、学生が医療者としての自覚を高め、自己を形成する過程を考えてみよう。その過程には、専門科目のほかにも、さまざまな事柄についての創造的な理解と知識が関わりをもつであろう。

- ・ 生命の「驚き」にみちた営みについての自然科学的知識
- ・ 死を悼む文化の起源とその意味についての文化人類学的知見
- ・ 「生老病死」という仏教的な死生観
- ・ 「医学的研究」の名のもとに生命の尊厳が踏みにじられた歴史
- ・ 肉親の死に直面した喪失感とその死の受容を描いた映画や文学
- ・ 患者や患者の家族として直面した医療制度の問題
- ・ 貧困や戦争のために医療を受けることもできない諸地域の現実、等々

これらいずれもが医療者としての自己形成に関わり、専門家教育を支えるのである。このように考えるならば、専門家教育はどの教養科目とも接点を見出すことができよう。

### 《教養教育の実践例》

私は文化教養ゼミの個別ゼミで、当初は全体講義の内容について理解を深め知識を定着させようと復習に力をいれていた。しかし、ここ数年は学生の問題意識と全体講義担当者の学問とに「橋を架ける」ことがなにより大切だと考えるようになった。したがって、ゼミの内容もリハビリテーション学部の学生ということ強く意識したものとなっている。たとえば、私が担当する全体講義では「百歳を過ぎても『寝たきり』からぬけ出せる」というテーマで、105歳になる祖母の体験を語りながら、私たちの社会の高齢者観の問題を考え、福祉の思想を伝えようとしている。私の他の担当科目においても同じような考えから授業を展開している。倫理学では「高齢者の処遇とその倫理的問題」「パーソン論を考える」、哲学では「ギブソンの知覚理論とアフォーダンスの概念」「超音波歩行補助具ソニックガイド」などをとりあげ、教養科目への「とっかかり」を学生に提示しようと苦心している。それは、自分なりの「専門家教育を中心とした教養教育」の試みであると考えている。

- (1) 2006年度の星城大学リハビリテーション・システム開発研究所主催のシンポジウム「臨床実習システムの現状と課題」
- (2) 佐藤学(2004) 教養教育と専門家教育の接合、東京医科歯科大学教養部第1回FD講演会

(中島英司)

## II. 教養教育の理念と実践

どの大学のどの学部においても教養教育の重要性を否定することは少ないと思われる。しかし、実際には、なかなかその重要性が認識されていないのが現状ではないだろうか。この理想と現実の溝を生めるため、われわれ一般教養に携わる教員で、この研究会を立ち上げた。研究会の議論と成果が、将来的にリハビリテーション学部のカリキュラムに反映されていくことが望ましい。研究会では、「はじめに」にあるように、「教養教育とは」という問題について今回は共通認識を得ることはできなかったが、この最重要課題については今後の更なる検討をまち、ここでは私が考える「教養とは」という考えとその実践例を紹介したい。

### 《教養とは》

「教養」とは何かという問いに対しては、いろいろな答えがある。ここでは、私が考える「教養」について考えを述べる。「教養」とは、一言で言えば、人間として社会で生きていく上で必要な「生きる力」である。すなわち、社会生活において問題が起こったとき、世間の風評にまどわされることなく、「自分の力で考え」、「自分の力で工夫し」、「自分の力で答えを創造していける力」であると考える。個人個人は多くの知識や技術を身につけている。「教養」は、個人が身につけている知識や技術を使いこなせるようにする「人間としての生きる力」ではないだろうか。

たとえば、われわれはたくさんの方々の言葉を知っているが、それは単なる知識に過ぎない。言葉を口から発したり、文章にしたりするとき、知識としての言葉の中からその場、その状況に正しく合った適切な言葉を選択することになる。正しい判断と選択が、適切な状況下での適切な表現となって表れるのだろう。朝、人に会ったとき、「今晩は」と挨拶するのは特殊な人以外はいない。お悔やみに行った席で、親族の方々に、「お会いできてとてもうれしい」などという表現は

適切なであろうか。知識としてもっている言葉の中から、その状況に合った言葉を適切に選び、表現できる人間を「教養人」と呼ぶのではないだろうか。

医学についても同じことが言える。医師の資格は今の日本では最高の資格のひとつといえる。難関の医学部を卒業し、これまた難関の国家試験に合格し、初めて医師になることができる。医師としての知識、技術は申し分ない。しかし、もし、その医師が「教養」に欠ける人物であったらどうであろうか。一番大事な診療行為を手抜きするような医師、儲けばかりを追及し、挙句の果ては、不正行為を犯す医師、患者の命を救うよりも自分の地位や名声を大事にする医師、このような医師に自分の命を任せようと誰が思うだろうか。正しい判断力をもたない医師、すなわち、「教養」のない医師を信頼できるであろうか。

それでは、「教養」を身につけるにはどうすればよいのか。われわれの暮らす社会では、さまざまな困難な、しかし、解決しなければならぬ問題が発生する。それらに対して自分なりの答えを出せる人が教養人であると考えている。その際、われわれはどのようにして答えを出していけば良いのかを登山を例に検討してみたい。

登山をするに当たり、われわれはできる限りの情報を集める。案内書や地図などを利用して情報を集める。最近では、インターネットを利用したり、また、その山をよく知っている人から情報を得たりする。いよいよ、登山に出かけ、途中で分岐点に多く出くわす。そのとき、あらかじめ集めた情報だけでなく、道中に得た情報を頼りに左右の道を選ばなければならない。しかし、集めた情報のすべてが真実を語っているとは限らない。そこで集めた情報の真偽を吟味する必要がある。そして、正しいと思われる情報に基づき、自分の進む道を判断する。自分が正しいと判断した道に進み、山頂に到達できるか、谷底に転落するかは自分が責任をもたなければならない。

上述したことをまとめると次のようになる。まず、情報、すなわち、知識を与える。集めた知識（情報）を吟味し、整理する。正しい知識（情報）を元に解

決策を考える。すなわち、判断を下し、実行に移す。判断し、実行した結果については自ら責任を取る。これができる人間をいわゆる「教養人」と呼んでよいのではないか。そして、「教養」を身につけるための過程を見てみると、これは、大学で行われているまさに学問研究そのものである。それゆえ、「教養人」となる一つの方法は、学問をすることといえる。

### 《その実践例》

学生に学問研究の方法を教えることが大学における教養教育の最大の目標であると考え、以下の点に重点をおいて実践している。学問研究の成果はそれぞれ研究論文という形で現れる。それゆえ、学問研究を目指す学生にとって、最終学年次に作成される卒業論文が成果といえよう。卒業論文を纏め上げることこそが、「教養人」への第一歩といえるのではないか。そのための準備は1年次から始められなければならない。すなわち、論文とは何か、論文はどのようにまとめればよいのかといった点を指導し始める必要がある。本学独自の「文化教養ゼミ」はそれに適した科目である。

具体例を挙げて説明したい。私は個別ゼミを論文作成の初歩を指導する時間に使っている。最初の授業では、まず、前節で述べたような「教養とは」に対する私の考えを説明し、「教養」を身につける一つの方法は「論文」の書き方を習得することであることを示す。さらに、論文とは何か、どのようにしてまとめればよいかを説明する。その内容は、紙面の関係で詳しく書くことができないが、その概要のみを示したい。全体講義からあるテーマについての情報・知識をえる。その情報にこれまで自分がもっていた情報を加え、それらの真偽を吟味する。自分が正しいと判断した情報を材料にして、自分の意見を論証していく。論証については、論文作成において最も重要なことであることも説明し、具体的な論証の仕方の一つも示しておく。そして、最後に自分の結論を導いていく。

以上の過程を前期 15 回の授業で繰り返していく。これによって、自ら考えをまとめ、自分の意見を形成し、発表するという能力が身についていく。まさに、「教養人」への第一段階を上り始めたといえないだろうか。なお、他の一般教養科目についての実践については、次回に譲りたい。

(田辺三千広)

### III. 医療系学部における教養教育のあり方実践例

文化教養ゼミは学生に自己認識の確立や他者理解を教育する授業である。そのことを念頭に、全体講義を受けた個別授業では関連の話題づくりに腐心した。どのような話題づくりかを、末尾にまとめた。以下まず、平成 18 年度の文化教養ゼミにおける教育の実践例である。

第 1 週：「文化、教養、学問とは」という全体講義だったが、日本神話の白兔の抜粋を用意し、因幡の白兔に登場する大国主命が兔を治癒したことなどを取り上げ、医療に従事する者の心得を説いた。

第 2 週：「百歳を過ぎても『寝たきり』からぬけだせる」という全体講義だったが、個別授業では、イタリアのヴェルディ創設の「人生を奏でる家」を描いたビデオ（約 20 分）を、解説とともに上映し、また、アフリカにおける老人と子どもについての山口昌男著「アフリカにおける老人と子ども」を読ませ、あらかじめ作成した設問に答えさせた。日本の弱者政策を一層推進させる必要性を感じてくれたと思われる。

第 3 週：「現代社会における保健医療の問題」という、感染症など、現代最も重要な病例の解説の全体講義であったが、個別授業では、現代日本の医療制度の現状（薬の開発、医療スタッフの増加、医療費の高騰など）を「医療制度の将来」『松谷・藤正「人口減少社会の設計』を読ませて設問に答えさせた。医療の背景の理解、医療が社会とともにある、この理解をめざした。

第 4 週：環境に関する映画の上映の全体講義のみで個別授業はなかった。

- 第5週：「情報倫理」という全体講義。個別では、地縁社会、血縁社会、とともに今やネットワーク社会が登場してきていることを考えさせつつ、かような社会への対応を考えさせた。
- 第6週：「生物と人間のつながり」という全体。個別では全体講義で話題となった人類による家畜の利用について考えさせた。
- 第7週：「日本の公共政策」という全体講義であったが、個別授業では、隠岐島の病院の産科医師不足に関する新聞記事を取り上げ、日本医療の抱える一問題を考えさせた。
- 第8週：「源氏物語」が全体講義であったが、個別では、源氏物語に関する設問を作成し、パソコンで調べさせた（年立、書院造、十二単など）。ついで、高校の文学史の教科書を用いて、源氏に出てくる語彙の学習をさせた。
- 第9週：「モンゴル文化」という全体講義。モンゴルの遺跡発掘を主な内容とする講義であったが、個別では、モンゴル人と馬との関わり、モンゴル文化に占める馬の位置を理解させた。朝日百科『遊牧民』を利用し、設問に答えさせた。また、モンゴル最大の祭り、ナーダムの模様などのビデオを上映し、モンゴル文化の理解を図った。
- 第10週：「インドネシアの文化」と題された、インドネシアのスマトラの母系社会をテーマとした全体講義であったが、個別授業では、全体講義にも出ていた、「移住」「遍歴」について考えさせた。また、インドネシアのデパートに勤務する女性たちを話題にしたビデオ、売り子の出身から多民族社会が知る、ビデオを上映し、インドネシアの現在の一コマを理解させた。
- 第11週：「エジプトのメッカ巡礼壁絵」というメッカ巡礼を果たした者の家に描かれる壁絵、—これはエジプトにおける体面空間を成す—、を題材にした全体講義を受けて、日本家屋における「体面の空間」についてパソコンで調べさせ、考えさせた。
- 第12週：「韓国文化」をテーマとする週であったが、講師が代行し、主とし

て日韓関係の通史の全体講義があった。個別授業では江戸時代の「朝鮮通信使」について解説とビデオ上映をし、近隣諸国との交流を考える授業とした。

第13週：「シェイクスピア」という全体講義を受けて、シェイクスピアの活躍した16世紀のイギリスを勉強させた。シェイクスピアが登場した頃のロンドンには、タバコが流行しだした頃で、ピューリタニズムの精神も広がりを見せていた。「ロンドン庶民生活誌」（みすず書房）の一部を利用し、設問を作成し答えさせた。また、イギリスを代表する国立大学ケンブリッジ大学の演劇部を紹介したビデオを上映した。

第14週：「デカルトの知覚理論と現代」という全体講義を受けて、デカルトの知覚理論に影響を及ぼしたと思われる中世アラブ人科学者イブン・ハイサムを調べさせた。このアラブ人の理論は、デカルトにもトマス・ベーコンにも影響を与えたことがわかった。

第15週：「ロシア文化」と題し、社会主義崩壊後のロシアの社会を取り上げた全体講義であったが、個別授業ではヨーロッパ史におけるロシアの位置関係を考えさせた。19世紀のヨーロッパにおける革命とロシア革命の関わり、チャイコフスキーの音楽史上の立場（ヨーロッパの音楽の構成）をとりあげた。以上、総じて、個別授業をまとめれば、

- 1) 全体のテーマ理解のための補強の意味合いの授業
- 2) テーマから派生した関連のテーマなり問題を考える授業
- 3) テーマの主張に対する反対的立場を取り上げた授業

であったが、狙いとするところは、外国を勉強することで、先進・後進、あるいは優劣といった見方を是正し、知らないことや他人の世界への好奇心を呼びさまし、そのことを通して、多様性への感受性を培うことであった。21世紀の今日、我々が社会人として生きる上での心得も、家庭人、会社人、地域人、国際人としての心得というように、多様になっているのではないか。また果たすべき役割も多様になってきているのではないか。今後は後者のことをもっと

教育すべきではないかと考える。人文社会的知識は益々必要になってくると思われる。  
(森川孝典)

#### IV. 2006 年度文化教養ゼミの実践例 (C クラス・作業療法学専攻)

2006 年度の文化教養ゼミは、リハビリテーション学部と経営学部の授業内容を分けて実施することになった。このため個別授業では、例年になく「リハビリテーション学部学生に対する教養教育」を意識して運営した。以下、前期十五週間における授業実践の内容を報告する。

第1週:第2週 of 全体講義を担当する講師が用意した資料を用いて予習をする。

第2週 (全体講義「百歳を過ぎても『寝たきり』からぬけだせる」): 全体講義のeテキストの内容に関する設問からなる自作の課題を与えた。

第3週 (全体講義「ロシア文化」): 講義の趣旨が「現代社会の乱れを改善するために伝統文化をどう生かすか」ということにあったことから、これを翻案した課題 (①日本社会に乱れがあるとすればどこに感じるか、②その原因はどこにあると思うか、③乱れを改善するために伝統文化のどんなところが生かせると思うか) を与え、数人のグループ単位で議論させた。議論の内容は各自が整理し、授業終了時に提出した。

第4週は、連休期間中の関係で全体講義のみが実施され、個別授業はなかった。

第5週 (全体講義「情報倫理」): 自作のパワーポイント「情報倫理」を用いて全体講義とは異なる観点から講義したのち、全体講義の講師が用意した課題を与えた。

第6週 (全体講義「生物と人間のつながり」): 大学から全学生に宛ててAIDS啓蒙のパフレットが配布される機会に鑑み、自作のパワーポイント「AIDS」を用いてエイズに関する基礎知識の講義を行い、講義内容に関する設問からなる課題を与えた。

第7週 (全体講義「日本の公共政策ー小泉政治の5年間」): NHKスペシャル「小

泉政権の5年」のビデオを視聴し、内容に関する課題(①番組のテーマは何か、②第一部「島根県」では何が問題でそれについてどう考えるか、③第二部「北海道」では何が問題でそれについてどう考えるか、④全体を通して印象に残ったことや感想を述べよ)を与えた。

第8週(全体講義「源氏物語」):自作のパワーポイント「源氏物語と紫式部」と課題(①源氏物語とは何か、②源氏物語を学ぶ意味はどこにあるか、③自由感想)を用いて、源氏物語に対する理解を深めるように努めた。

第9週(全体講義「モンゴル文化」):NHKビデオ「街道を行く・モンゴル紀行」を視聴し、自作のパワーポイント「騎馬民族」で適宜内容を補足した。視聴終了後、自作の課題を与え、ビデオに登場したモンゴル女性の人生から「草原の民」の生き方を考えさせた。

第10週(全体講義「インドネシア文化」):全体講義で触れたインドネシアの「母系社会」のあり方から、各自に「家族」や「夫婦」のあり方について議論させる。その要領は、「ロシア」の個別授業のときと同じであった。

第11週(全体講義「イスラム世界の文化」):自作のパワーポイント「中東世界」と課題に取り組み、中東地域・イスラム文化と、日本との関係を理解させるように努めた。

第12週(全体講義は講師の都合により加藤が代講したので、個別授業は内容を切り離れた):名古屋で起きた「老老介護」による悲劇的な事件を題材に高齢者福祉の問題を論じたNHKの番組のビデオを視聴し、自作の課題に取り組ませた。

第13週(全体講義「イギリス文化」):自作のパワーポイント「W.シェイクスピアとその作品」を用いてシェイクスピア劇の特色と日本の演劇・芸能との関係について講義し、「優れた文学に国境はない(時間と空間を越えた普遍性)」ことを理解させるよう努めた。講義終了後、各自のパソコンで「シェイクスピアの森(作品紹介HP)」を開いて作品のあらすじを1点読み、

自作の課題に答えさせた。

第14週（全体講義「デカルトの思想」）：現在の東海市地域が生んだ江戸時代の思想家・教育家である細井平洲の人物と思想を、自作のパワーポイント「細井平洲」と星城大学学歌を利用して講義し、課題を与えてその思想の現代的意味について考えさせた。

第15週（全体講義「現代社会における保健医療の問題」）：NHK「ある地域医療の挫折（E T V特集）」のビデオ視聴により市町村合併によって従来の理想的な地域医療が崩壊した事例を見せ、課題（①何がどう問題になっているのか、②なぜ問題になっているのか、③あなたはどうか考えるか）を与えて医療を取り巻く社会環境の問題を考えさせた。

「医療人の育成」という学部の教育目標の性質上、カリキュラムが高度な専門性を帯びることになることは避けられない。それだけに、職業を問わない「市民的教養」を身につけさせる教育や、発想を自由に遊ばせる「リベラルアーツ」教育の存在意義はとても重要である。

しかしながら、医療に携わるということが人間の生きる営みの最も基本的な問題である「生老病死」に直接向き合うことでもあることを考慮すると、医療の世界を目指す学生の属性に応じた、「専門知以外の知」から彼らの将来および職業的意識に示唆を与える教育の必要性も感じる。一般の教養科目は基本的には全学共通科目なので、文化教養ゼミの時間を大いに活用することが求められる。この点、2006年度では、全体講義題目に「百歳を過ぎても『寝たきり』からぬけだせる」「生物と人間のつながり」「現代社会における保健医療の問題」が導入されているほか、筆者の個別授業でも老老介護問題や地域医療崩壊問題などを取り上げ、医療・福祉の現場をめぐる社会問題にも関心を喚起するように努めてきた。このような方向性は、今後も引き続き考慮されることが必要である。すなわち、文化教養ゼミの授業計画は、「リベラルアーツ」と「医療をめぐる社会問題」の二方向から組むべきであろう。

ただし、一口に「リベラルアーツ」的なトピックを用意するとしても、今後「生老病死」の問題に関わることになる学生たちの将来を考えれば、豊かな感性を磨く情操教育と人間性への洞察を深めることを目的とする人文学分野を中心に編成し、さらに美術・音楽など芸術関係の充実を図るべきであろう。

(加藤順一)

※ 本稿は、平成 18 年度 星城大学リハビリテーション学部 学部研究費(特別研究)による研究の一部である。